

オオタバコガの発生情報

現在、フェロモントラップによるオオタバコガ成虫の誘殺数が増加しています。これまでの気象の推移や今後の気象予報等を考慮すると、今後、発生量が増加し、各作物に被害を与える可能性があるため、本虫の発生に十分注意して防除を行うようご指導願います。

1 オオタバコガの発生状況

(1) フェロモントラップによる本年4月～8月第3半旬までの総誘殺数は、合志町では150頭（平年71.6頭、昨年58頭）と平年及び昨年に比べかなり多く推移しており、鏡町では8.9頭（昨年14.6頭、一昨年14.8頭）と昨年及び一昨年に比べやや少なく推移している。また、ピーク時の誘殺数は、合志町では6月の第6半旬で25頭、7月の第6半旬で42頭と平年に比べかなり多く、鏡町では昨年及び一昨年に比べ同等程度となっている。

(2) 本年5月～8月第3半旬までの気象の推移は、第2図のとおり、気温は高く推移し、降水量は6月下旬と7月上旬を除くと全般的に少なく、特に7月中旬以降は少なく推移している。これらの気象の推移は、オオタバコガの増殖に好適と考えられ、野外における本虫の発生量が多くなる恐れがある。また、今後の気象については、福岡管区气象台が8月20日に発表した九州北部地方の3ヶ月予報によると、気温は、9月、10月ともに平年に比べ高く、降水量は、9月は平年並、10月は平年に比べ少ないという予想である。このため、今後は、本虫の発生量の増加や高温による生育促進から発生世代数の増加等が考えられ、秋期以降の本虫による被害の拡大及び長期化が懸念される。

なお、過去にオオタバコガの発生量が多く被害が問題となったH6年、H10年の気象も、夏期から秋期にかけては高温少雨で推移しており、本年も十分な注意が必要である。

(3) オオタバコガは例年9～10月にかけて発生量が多くなり、各作物に被害を与える。現在栽培されている夏秋作野菜やキク等に加えて、今後は、冬春作野菜や花き類の作付けが本格的に始まることから、本虫の発生に十分注意して防除を行う必要がある。

2 防除上注意すべき事項

- (1) 本虫は連続的に発生するため、圃場内をよく観察し早期発見に努める。
- (2) 老齢幼虫になると薬剤による防除効果が低下するため、早期発見に努め、若令幼虫期に防除を徹底する。
- (3) 果菜類では、被害果の早期摘果と処分はその後の発生を抑制するのに有効ある。また、摘芯、摘果した腋芽や花蕾等は、本虫の卵や幼虫がついている場合もあるため、ほ場内や周辺に放置しない。
- (4) 施設栽培では施設開口部を寒冷紗で被覆し、成虫の侵入を防ぐ。
- (5) 使用薬剤は、県または地域の防除基準に従い、使用基準を遵守して農薬の安全使用に努める。